



フェミニズムの行方 - ジェイン・オースティン、 シャーロット・ブロンテと近代中国女性作家たち [論文要旨及び審査の要旨]

| | |
|--------|---|
| 著者 | 劉 鳳斌 |
| 発行年 | 2015-03-31 |
| 学位授与機関 | 関西大学 |
| 学位授与番号 | 34416甲第547号 |
| URL | http://hdl.handle.net/10112/9102 |

[4]

| | |
|------------|--|
| 氏名 | 劉鳳斌 ^{りゅう ほう ひん} |
| 博士の専攻分野の名称 | 博士(文学) |
| 学位記番号 | 文博第 227 号 |
| 学位授与の日付 | 平成 27 年 3 月 31 日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第 4 条第 1 項該当 |
| 学位論文題目 | フェミニズムの行方 —ジェイン・オースティン、シャーロット・ブロンテ と近代中国女性作家たち |
| 論文審査委員 | 主査教授 坂本 武 副査教授 干井 洋一 副査教授 井上 泰山 |

論文内容の要旨

劉鳳斌氏の学位請求論文は、英国十九世紀の女性作家たち、ジェイン・オースティンとシャーロット・ブロンテをフェミニズム思想の観点から比較考察し、合わせて近代中国女性作家たち、謝冰瑩（しゃひょうえい）、丁玲、張愛玲などの作品を同じテーマのもとに論じた意欲的力作論文である。論文構成は、序論から二部全 6 章にわたり、結論、注、参考文献一覧を合わせて 182 頁に及ぶ。

序論では、1) 文学とフェミニズム—私の場合、2) 英国フェミニズムに関する先行研究、3) 中国フェミニズムに関する先行研究に分けて論文全体を俯瞰する。特に 1) 「文学とフェミニズム—私の場合」は、劉鳳斌氏の家族史を自ら振り返って、母親という存在の意味を問い直す。そのきっかけは日本留学でフェミニズムという思想に出会ったことだったという。ここには文学研究の基底に自らのアイデンティティ探究を置くという、文学研究というものの大切な意義が語られる。このことによって劉氏の本研究の内的必然性が納得させられる。また 2) と 3) の英国および中国の先行研究についての記述も充実したものである。英国フェミニズムに関する記述で重要なことは、劉鳳斌氏の立場を 19 世紀中期から 20 世紀初頭にかけての「第一波フェミニズム運動」のいわゆる「リベラル・フェミニズム」の思想家たちと同調させていることである。その思想家たちとは、英国フェミニズムの聖書と言われる『女性の権利の擁護』*A Vindication of the Rights of Woman* (1792)によって知られるウルストンクラフト Mary Wollstonecraft、19 世紀を代表する経済学者・政治家、*The Subjection of Women* (1869) の著書もあるミル John Stuart Mill である。中国のばあい康有為、「五四新文化運動」の胡適、魯迅などの活動をあとづけ、新聞や雑誌上の女性問題の議論を集めた各種の資料（「近代中国女権運動史料 1842—1911」、
「中国近代女子教育史 1894—1945」など）も検討されている。

第一部「十九世紀英国におけるフェミニズム—ジェイン・オースティン、シャーロット・ブロンテを中心に」では、第一章『高慢と偏見』と『ジェイン・エア』に見られるフェミニズム、第二章「セクシュアリティの表象とフェミニズム」、第三章『ジェイン・エ

ア』におけるフェミニズム」というように具体的な作品が論じられる。

第一章では、『高慢と偏見』と『ジェイン・エア』に関するフェミニズム批評の歴史をたどることから始める。デフォー、スウィフト以降の英国近代作家たちの作品の特質を冒険小説、心理小説、ゴシック小説などのジャンル論の他にプロット、性格描写、写実主義というような技法の面に焦点を当てて、英国小説史上のジェイン・オースティンやブロンテ姉妹の文学の特徴を明らかにする。これらの女性作家のヒロインたちの存在、あるいは彼女たちの運命の背景的事情に「家父長制社会」があり、限嗣相続(entail)の制度があることが指摘される。

劉氏は、ジェイン・オースティンをフェミニズムの流れの中で捉える議論をアリスティア・ダックワースやメアリー・ラセルズによる所論を踏まえてまとめる。オースティンのフェミニズム批評の代表的著作である Marilyn Butler, *Jane Austen and the War of Ideas* (1975) や Margaret Kirkham, *Jane Austen, Feminism and Fiction* (1983) などの議論も丁寧に要約している。

シャーロット・ブロンテのばあいのフェミニズムの初期の文献として取り上げている Norman Collins, *The Facts of Fiction* (1932) (その中の“The Independent Brontës”の章) は、文献の古さもあり従来あまり注目されなかった書物であるが、劉氏は「女性の権利や女性の自由を確立した最初の小説」として『ジェイン・エア』を称賛するコリンズを重視するのだ。その次に注目するのは、英国の小説家 Elizabeth Bowen の *English Novelists* (1942) である。ボウエンは、『ジェイン・エア』を「最初のフェミニスト小説」と定義する。そしてこれらの議論の集約的表現として Sandra M. Gilbert and Susan Gubar, *The Madwoman in the Attic: The Woman Writer and the Nineteenth-Century Literary Imagination* (1979) (邦題『屋根裏の狂女』) を取り上げ、主人公ジェインのみならず脇人物であるバーサ・メイソン(ジェインに求婚するロチェスターの隠し妻)の存在に焦点を当てる議論に注目する。

劉氏の以上のような先行研究への配慮は、概ね慎重かつ丁寧であり、資料の範囲も広範にわたっている。

エリザベス・ベネットとジェイン・エアの「女性意識」の相違点を論ずる第一章第2節では、二人のヒロインの生き方が対比的に述べられる。ジェイン・オースティンのばあい、男性は「観察者」であり、女性は「被観察者」である。シャーロット・ブロンテのばあい、女性は新たな「私」の物差しで世間を評価する。エリザベス・ベネットは、「真の愛を追及する勇気を欠いて」、家父長制社会の「伝統的婚姻モデルの内部」にとどまる。一方、ジェイン・エアのばあい、彼女は受け身のままではいず、地主ロチェスターとの階級差を乗り越え、自らの愛を告白する。

ではどうしてこのような違いが出てくるのかという問題をさらに氏は追及する。第3節「相違点の形成要因について」で両作家の社会的身分の階級差が論じられる。オースティンのばあい、階級は上層だがその社交の範囲が越えられることはなく、そこに彼女の階級の「限界」が反映されているという。ブロンテのばあい、血統も経済力も人脈も劣位であり、ブロンテ家は地主階級(ジェントリ)にも下層の民衆レベルにも溶け込めなかったという「不安定で窮屈な立場」に立っていたという。ブロンテ姉妹には「内面上の自我喪失

の危険」があり、結婚の見込みがなければ、生きていくには「ガヴァネス」の道しかなかったことが明らかにされる。劉氏の議論はさらに「摂政時代」と「ヴィクトリア時代」のモラルの変化やアメリカ独立戦争、フランス革命、ナポレオンの台頭と失脚などの政治的背景も視野に入れられる。議論のポイントは、この間女性意識は大いに「覚醒」しつつあったということである。

第二章「セクシュアリティの表象とフェミニズム」では、ジェイン・オースティンの『高慢と偏見』と『エマ』、そして『マンスフィールド・パーク』におけるセクシュアリティの表象をテーマにしている。「つねに人と人との関わりの中で調和のとれた人物像を求め」、中庸と節度を保持する態度がオースティンの基本的創作態度とされているが、しかし時に彼女の作品にはある性的意味を含んだ「曖昧性」が含まれるという。中でも『エマ』の「謎詩（なぞうた）」(charade)を扱う場面（第9章）の分析は興味深い。主人公エマの父親ウッドハウス氏が、しきりに思い出そうとする18世紀のシェイクスピア俳優、David Garrick (1717-1779)の謎かけ詩、“Kitty, a fair but frozen maid”の詩行の中には18世紀の俗語のレベルで解けば「性的ほのめかし」が顕著に浮かび上がる言葉が用意されているというのである。『高慢と偏見』のばあいのセクシュアリティの現れに関しては、女性の「身振り」や「舞踏会の場」、「エリザベス・ベネットの瞳」、「散歩の情景」などの微妙な描写に注目している。『マンスフィールド・パーク』のばあい、その体現者として「ハーブを携えた誘惑の魔女サイレン」(Tony Tanner)と評されるメアリ・クロフォードが登場するが、彼女は自らの「道徳的欠陥」を自覚させられる機会もなく物語の舞台から消される。この作品のばあい、サー・トマスが西インド諸島 Antigua の植民地経営に何らかの問題が生じて、それを解決するために屋敷を留守にする挿話は、もっと注目してよいだろう。主の留守の間に若者たちが演ずる素人芝居『恋人たちの誓い』は、彼らの間に性的誘惑の種をまいて物語に面白い緊張感を漂わせるからである。

第三章『ジェイン・エア』におけるフェミニズム』では、日本語訳と中国語訳との差異に着目して『ジェイン・エア』を論じている。翻訳は、語学的操作の問題だけでなく、「何を訳し何を訳さないかの選択の中に外国文化や思想への深い理解が現れる」と言って、第2巻10章の一節を例にあげる。その中の語句、‘your place’, ‘useful and pleasant’を取り上げ、‘your place’のばあい、祝慶英訳では訳語に表されず、宋兆霖訳、黄源深訳、河島弘美訳では、いずれも「あなたの本分」と訳され、阿部知二訳では「あなたの身の上」と訳される。‘useful’は中国語では「へつらい」のニュアンスを含むばあいもあり、‘pleasant’は、「子供や女の子の賢さや可愛らしさ」のニュアンスがあるという。用語の選択自体に性差の表象が存在するという今日のフェミニズム研究の流れがあるが、劉氏の議論は翻訳語の中にもその流れがあることを示す興味深い論考である。

第2節では、ブロンテが描いた「悪しき母」、「不完全な母」、「良き母」のタイプを詳説する。フェミニズムの視点から見てジェインは「良き母」となる。

第二部「近代中国におけるフェミニズムとセクシュアリティ」は、第一部の発展形として第四章「中国の儒教的家父長制—その特徴」、第五章「フェミニズムの視野における反逆するヒロイン」、第六章「引き裂かれた女」に分けて論じられる。この部分は劉氏自身の立場を明らかにしようとする試みであると言ってよい。第四章では、中国の家父長制イデオ

ロギーの背景として「千年以上の長きにわたって、中国人にとって支配的宇宙論であり、政治学であり、あるべき理論と態度の教義」であった儒教があり、その父親の権力を代行する存在として母親が嫁を監督し、娘の結婚を決定する「権威」を認められたという。

第五章は、そうした母への反逆を示す二人の女性作家の作品、謝冰瑩の『ある女兵士の自伝』（1936）および張愛玲の『傾城の恋』（1943）と『金鎖記』（1943）が詳説される。いずれも家父長の代行者である「母」に反逆する姿が描かれる。第六章では、丁玲の『ソフィ女子の日記』（1927）を取り上げ、1920年代の性解放の風潮をあからさまに示すヒロインの生き方を時代背景とともに描き出す。「人間の解放におけるエロスへの欲求の正当性」を主張した丁玲は、1950年代の「文化粛清」の時代には批判的的となり、筆を断った。しかし1980年代になるとフェミニズムの進展に後押しされて再評価され、その名誉も回復されたという。現代における丁玲の評価は、中国におけるフェミニズム文学の先駆者である。

結論では、フェミニズム思想について国によってどのようなニュアンスの違いがあっても、「重い桎梏のうちに閉じ込められ、あらゆる圧迫のもとに不幸な生活を送っている女性たちに対して、深い同情を抱き、あるいはその桎梏と圧迫とにいきどおりを感じ、そこから女性の解放をこいねがっている」という一点では共通しているという。

論文審査結果の要旨

劉鳳斌氏の研究は、テキストの理解にさいしても資料の収集にさいしても緻密かつ丁寧であり、労を厭わず全国の大学図書館の資料にも当たり、イギリス俗語を調べるために本学図書館の「細江文庫」を調べもする。氏の付した注釈の数は、174個に上り、その意欲のほどが伺われる。

本研究のテーマであるフェミニズム思想に対する氏の立場は、「リベラル・フェミニズム」の枠内にとどまっているようだが、英国および中国、そして日本の近代の思想的潮流を近代の始まりから説き起こそうとする、その努力は大いに評価してよい。

公聴会では、中国におけるフェミニズムの起源については再考の余地があると指摘されたが、今後のさらなる研究を待ちたい。日本語の文章能力も博士課程に入るところから格段に進歩した跡が伺える。劉鳳斌氏の研究者としての基本姿勢は、将来の大成を期待させるものである。

よって、本論文は博士論文として価値あるものと認める。